

2026（令和8）年度

国語

13：30～15：10

文学部

国文学科

一般選抜(中期日程)

注意事項

1. 合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があったら受験番号を解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. 問題は1～11ページまであります。落丁、乱丁、印刷不鮮明、よごれの箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答は必ず解答用紙の指定された解答欄に記入しなさい。
5. この冊子は持ち帰ってさしつかえありません。

問題は次のページ
からはじまります。

(一) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

高村光太郎の《手》。日本近代彫刻史を代表するこの塑造は、どこかしら仏像の面影を宿している。光太郎が傾倒したロダンにも手の造型があるけれど、ふたつは似て非なるものだ。ロダンによる手の塑造が表面の強い張りをもち、捻れるような力動感をはらんでいるのと、これは、かなり趣を異にしている。様式感が実在感を凌駕^⑦しているのである。それゆえロダンの手にくらべると光太郎の《手》は、いかにも弱々しく見える。だが、この弱さこそ、じつは《手》が醸し出す静謐な魅力の源泉でもあるのだ。

一九一七年に《手》を制作したのち、光太郎は、やがて《鯨》や《蟬》など一連の木彫によって、《手》がはらんだ可能性を存分に展開させることになる。そこに見出されるのは江戸時代以来の手の記憶にほかならない。このことは父光雲との関係においてとらえられる必要がある。光雲は江戸仏師の流れを^①くむ木彫家であったからだ。光太郎は父の作品を「置物」と呼んで否定的な評価をくだしているが、しかし、彼の代表作である《鯨》が置物的でないわけではないのである。

近代の彫刻は、求心的な自律性をめざすがゆえに、優れた作品ほど、あたりを制圧する強さをもつ。しかし、置物はそうあつてはならない。置物は、床飾りのひとつとして、その在り方を規定されている。だから彫刻のような求心性を置物はめざさない。他の床飾りとの連関が重視され、その場への適合性が重んじられる。みずからの外へと向かう X 的な構え、ひとことといえば他への「配慮」が要求されるのだ。光太郎の《鯨》や《蟬》には、このような配慮が感じられるのである。

しかし、それでは《鯨》が置物であるかというところも、そう言い切れないところもある。《鯨》は、たしかに見た目には置物的だが、ヴォリュームの変化が生み出す動勢と、実在感を醸し出す量塊のしつらえによって優れた彫刻性をも有しているからである。だが、それにもかかわらず、《鯨》は、自己完結的な求心性にかたよらず、他への配慮を感じさせる。《手》についても同じことができる。その形象はロダンに似てロダンのにあらず、他なるものを受け入れる静かなる度量とでもいふべきものを身に帯びているのだ。

強さと純粹さをめざす近代彫刻の立場からすれば、光太郎の《手》の在り方は弱点でしかありえまい。しかし、このような彫刻

によって日本の近代彫刻が達成をみた事実は重い。近代化におけるナシヨナリティの発現として、この事実を無視するわけにはいかない。

置物がもつ他への配慮は、じつは工芸というジャンルの特質にはかならない。それゆえ置物は、彫刻と区別されて工芸に分類されるのだけれど、この配慮という在り方は、日本社会における造型の重要な特質であった。江戸時代以前の造型は——陶器の絵付けや漆器の加飾はもちろんのこと、屏風絵にせよ、襖絵にせよ、掛け軸にせよ、仏像にせよ——そのほとんどすべてが工芸として作り出されてきたのである。

他への配慮という工芸の在り方は、工芸品が、しばしば身体を待ちもってくれるかたちやサイズをもっていることに端的に示されている。たとえば、茶碗は、手のひらに収まるかたちとサイズをもっているし、襖のサイズや引き手は、当然ながら人間の身体の出入りを計算に入れている。こうした工芸の身体性は触覚性として捉え返すこともできるだろう。

また、工芸品は、パフォーマンスを見込んで造型される。喫茶の作法は一種のパフォーマンスであり、ほんらい茶碗は喫茶のパフォーマンスのなかで映えるように——いうまでもなく絵付けも含めて——造型されるべきものなのだ。ふだんの食器^⑤においても事情に変わりはない。食事にまつわる日常の行儀作法もまた一種のパフォーマンスなのである。だからこそ、食物のセツシユ^⑥が、動物的な欲求のレベルにとどまることなく、社会的な行動として整えられるのであり、日用の雑器は、そのことに一役かっているわけだ。

日本社会における造型が、工芸というジャンルによって代表されてきたということは、それが近代の造型とは異なる発想によつて貫かれていたということを意味している。鑑賞的価値に関心を集中させる「美術」によって代表される近代の造型意志は、工芸的な配慮を不純として斥けずにはおかないからである。それに対して、江戸時代までの造型は、他への——みずからの外なる何ものかへの——配慮を含む造形として、みずからを実現してきたのであった。

このことにかんして、思い出すことがある。かつてジム・スパンカットが「インドネシアにおけるモダニズムの出現とその背景」という評論のなかで、ジャワ文化において fine art を意味する「カグナン」(= kagunan) という言葉について述べていた事柄

である。スパンカットによれば、「カグナン」は、鑑賞本位の近代美術の在り方とは異なり、賢明さやジゼン^④にかかわる道徳的な意味合いをもつというのだ。この「道徳」を、人間と人間が共にあるための規範というように解するならば、欲望の自然な発現に抗しつつ人間の生に様式的なかたちを与えることに一役かう工芸は、まさしく道徳的なジャンルとして「カグナン」と称するにふさわしいといえるだろう。

工芸が造型を代表する時代は、近代の到来とともに、いったんは歴史化されてしまった。しかし、完全に過去と化したわけではない。そのことは光太郎の《手》に認められるとおりである。そればかりか、工芸的なものの可能性は未来に属しているとさえいえる。他への配慮において成り立つ造型の在り方は、現代美術の重要な一角を形成しはじめているからである。日本に例をもとめれば、柳幸典^(注3)、ヤノベ・ケンジ、中村政人らの社会的歴史的現実にコミットメントするしごとが挙げられる。彼らのしごとは、美術の外なる現実とのかかわりにおいて発想されているという点において工芸の在り方と通底しているのだ。

とはいえ、柳やヤノベや中村のしごとを「工芸」と呼ぶことには、ためらいをおぼえざるをえない。このためらいは、「工芸的」という言葉が、表面的な仕上げの入念さという意味で、これまで貶し言葉として使われてきたという事情に、おそらく関係している。しかし、それ以上に、柳やヤノベや中村のしごとが手のはたらきから遠いところで営まれているかにみえることが、ためらいの大きな理由となっているように思われる。柳の電飾装置や、ヤノベの機械仕掛けや、社会システムの奥深くに踏み込んでゆく中村の交渉術的発想は、工芸の手仕事性から遠く隔たっている印象をまぬかれないのである。

それでは、彼らのしごとが手の記憶から自由であるかという点、しかし、そももいきれない。なんらかの「もの」を実現することを介して(その「もの」は中村のように書物のかたちをとることも、むしろありうる)成り立つ以上、手の記憶が、そこに鳴り響かずにはいないからである。ただし、ここにいう手の記憶とは、工芸の仕上げにおけるそれとは次元を異にする。^(注4)レヴィナスが、「もの」を手で作りに出すことで、人間はみずからの世界を生きるようになる」と述べた、まさにそういう意味で、彼らのしごとは手のはたらきにかかわっているのである。ハイ・テクノロジーに導かれて情報化社会が着々と進展し、「手の失権」(宮川淳)がかくれもない事態となりつつあるかにみえる今日この時にあっても、「もの」を実現することで世界の基底に降り立つアートは、

なお手のはたらきから——手の根源性から——けっして自由ではありえないのだ。たとえ、その手がすでに幻肢と化してしまっているのだとしても、である。

現代のアジアのアーティストたちのしごとには、実際に手のはたらきにイキヨ⑦するものが多くみられる。いわゆる手仕事であるが、これらもまた、世界——それは、われわれにとつての生の地平のことだ——が成り立つところまで降り立つ深さにおいてこそ捉えられるべきだろう。いまや商業的な謳い文句と化してしまった「手づくり」という概念に引きつけて、それらを価値づけることには警戒を要する。たんに職人的な手仕事の価値を今に甦らせるというだけのことであるならば、それは、時代に対する安っぽい心理的反動にすぎず、しかも、ノスタルジックな錯誤⑧でさえあるだろう。そればかりか、このような発想は、「手しごと」が現代に生きる実相さえも見失っている。

産業社会は、たしかに、工業と商業のケツタク⑨によつて、たとえばプリコラージュにみられるような手の美徳をかぎりなく瘦せ細らせ、情報社会における手仕事はキーボードを操作する指の運動にまで退行してしまつたかにみえる。情報化社会の進展が、ものを作り出す手のはたらきを遠い後景に追いやりつつあるのはたしかである。しかし、情報化を支えるハイ・テクノロジ―が、じつは手わざを必要としているという事実にも、われわれは注意を払わなければならない。二〇〇一年度の「現代の名工」に選ばれた工人の最年少者は半導体の組立工であり、ハイテク装備のジェット戦闘機の操縦士は、器機⑩の操作に「千手観音」のごとき手の動きを絶えず要求されるというのである。

職人的な手仕事や手わざは、その復権を、ことさらとりたてて言い立てるまでもなく、このように思いもよらぬところで生きのびている。だから、手仕事の復権というのは、無意味な御題目にすぎない。それによつては、手のアクチュアルな位相を捉えることなどできはしない。手の現在を捉えるためには、そうしたノスタルジックな発想を引き起こす根底にまで立ち返ってみることが必要なのだ。手が記憶する世界と人間の基本的なかかわりに、思いを馳せることこそが大切なのである。

ただし、そのとき留意すべきことが、ひとつある。それは、手の身体性ということだ。手が、「もの」を作り出すことによつて人間を世界にもたらす——世界を人間にもたらす——のは、手の所作が、世界に織り込まれた身体に深く根ざすことによつては

じめて可能となるからである。世界に織り込まれるとは、配慮という構えにおいて他なるものと関係づけられるということにほかならない。糸を次々と織り込むことで織物が形成されるように、身体を世界に織り込むことによって世界はわれわれにもたらされるのだ。

しかし、手は、あまりにも長いあいだ眼のしもべでありつづけてきた。これはきわめて重要な問題である。近代は、ガリレイの天体観測に端的に示されるように、見る力と知の力の運動によって展開してきたのだが、眼は鋭く世界を見抜くがゆえに、ときに身体を置き去りにしてしまう愚を犯すのだ。眼は、世界に臨む主体的意識を優先するあまり、しばしば主体に、世界への配慮を忘れ去らしてしまうのである。

敵機に意識を集中させる「千手観音」としての操縦士、顕微鏡の下の微細なピンセットの先端をにらみつづける半導体組立工のすがたは、まさに、手に対する眼の支配を象徴している。工芸品の入念な仕上げについても同様のことが指摘できる。眼の支配は、かくも深く、強い。そのような手の在り方について、アランは、ある対話篇のなかで、彫刻家に、こんなふうに語らせている。「ロダンの親指、あれはどうもいけない。親指というやつは、光線をたよりに肉付けしますから。ところが、じつさいに形を作つてゆくのは人差指なんです」(杉本秀太郎訳『彫刻家との対話』)、と。

眼のしもべならざる手のはたらきを、このアランのことばは明快な具体性において示している。粘土の塊の向こうがわに隠れて見えない人差指の触覚的なはたらきは身体性と親和的に連動している。このような手のはたらきは、しかし、修練を要する特別なものでは必ずしもない。ごく日常的な結ぶ、積みあげる、編むといった単純な行為のなかにも、それは見出される。これらの行為は、むろんのこと眼のはたらきと連動してはいるものの、しばしば、その自動性において身体の優位性を発揮するのだ。^Cアジアの現代美術における手の所作は、熟練の手並みより、むしろ、こうした単純な行為において、身体性を静かに活気だたせるように思われるのである。

高村光太郎が手によって《手》を塑造するという自意識的な所作において明らかにしたのは、日本社会に根ざす手の記憶であった。しかし、それはナシヨナリテイの域を越える可能性をも——「カグナン」の例にみられるように——はらんでいた。そして、^D

現代美術は、光太郎が行き着いたところをハルかに越えて、そのアートとしての可能性を拡大しつつある。そこに手のはたらきが端的なかたちで見出されるとはかぎらないものの、それを手の根源性から捉え返すことは、けつして不可能ではない。そして、手の根源性が身体性を介して工芸的なものの可能性に通じていることはすでにみたとおりである。われわれは、美術の根底に見出されるこのような手の存在を、ノスタルジーに^⑧オチイることなく、いまこそ、あらためて見出さなければならぬ。飛び交い、もつれあう大量の情報の中に紛れ込み、いまにも消え入りそうな世界に、いまいちど、そつと触れてみるために、そして、その後姿に向かって、ほんとうにそれでいいのか——と問いかけるために。

(北澤憲昭『アヴァンギャルド以後の工芸』による)

(注)

- 1 ナシヨナリテイ——国民性、民族性。
- 2 ジム・スパンカット——インドネシアの彫刻家、美術批評家。
- 3 柳幸典、ヤノベ・ケンジ、中村政人——いずれも現代の造型芸術作家。
- 4 レヴィナス——第二次世界大戦後のフランスの哲学者。
- 5 アラン——二十世紀前半のフランスの哲学者。

問一 傍線部⑦⑧の漢字に読みがなをつけ、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 空欄

X

 に入る適切な熟語を漢字で書きなさい。

問三 傍線部A「この配慮という在り方は、日本社会における造型の重要な特質であった」とあるが、どういうことか。具体的に六〇字程度で説明しなさい。

問四 傍線部B「いまや商業的な謳い文句と化してしまった「手づくり」という概念に引きつけて、それらを価値づけることには警戒を要する」とあるが、どういうことか。八〇字程度で説明しなさい。

問五 傍線部C「アジアの現代美術における手の所作は、熟練の手並みより、むしろ、こうした単純な行為において、身体性を静かに活気だたせるように思われるのである」とあるが、それはなぜか。八〇字程度で説明しなさい。

問六 傍線部Dについて、「ナシヨナリテイの域を超える可能性」をはらんでいたとはどういうことか。一〇〇字程度で説明しなさい。

(二) 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

賀茂神社の神職森基久の娘は容姿や教養にすぐれていた。彼女に想いを寄せる者たちのなかには、次期東宮として手厚く遇される伏見宮(のちの後伏見天皇)や、ひっそりとわび住まいする帥宮(のちの後醍醐天皇)がいた。それぞれの宮は想いを伝えようとおびただしい数の手紙を書いて娘に送ったが、彼女は軽々しくふるまって悪い噂が立つことをおそれて返事をしない。進展がないまま三年が過ぎた。

父は賤しうして母なん藤原なりければ、やんごとなき御子たちの御覚えはなほざりならぬを聞きて、「^アなどや今まで御いらへをも申さではやみにけるぞ」と、いといたううちわぶれば、^②御消息伝へたる二人のなかだち、ついでよしと思ひて、^(注1)「たらちめの諫めもことわりにこそはんべるめれ。^(注2)早く一方に御返事を」とかこち顔なりければ、娘、言ふはかりなくうちわびて、「いさやわれとはいかでか分く方はんべるべき。ただこの度の御文に、御歌のいとあはれに覚えはべらん方へこそ参らめ」と言ひて、少しうち笑ひぬる気色^エを、二人のなかだち、嬉しと聞きて、急ぎ宮々の御方へ参つて、かくと申せば、^オやがて伏見宮の御方より、取る手もくゆるばかりにこがれたる紅葉重ねの薄様に、^(注3)いつよりも言葉過ぎてあはれなる程なり。

思ひかね言はんとすればかきくれて涙の外は言葉^{ほか}もなし^{このは}

^③とあそばされたり。この上のあはれたれかと思へるところに、帥宮御文あり。これはさしも色深からぬ花染めのかをり返りたるに、言葉は無くて、^(注4)^(注5)

^B数ならぬみののを山の夕時雨つれなき松は降るかひもなし^(注6)

と。この御歌を見て、娘、^①そぞろに心あこがれぬと覚えて、^②手に持ちながら詠じ伏したりければ、^③早いづれをかと言ふべき程もなければ、^④帥宮の御使ひ、^⑤そぞろに独り笑みして帰り参りぬ。^(注7)

(『太平記』による)

(注)

- 1 たらちめ——母親。
- 2 はんべる——「はべる」の撥音便。
- 3 薄様——上質な紙。
- 4 花染め——露草の花で染めた色。藍色・薄桃・桜色などに染まるが、変色しやすい。
- 5 かをり返りたるに——色があせてしまった紙に。
- 6 みののを山——現在の岐阜県に位置する南宮山のこと。歌枕。

問一 傍線部ア「などや」イ「かこち顔」ウ「あはれに」エ「気色」オ「やがて」をそれぞれ現代語に訳しなさい。

問二 二重傍線部①「申さ」②「御消息」③「あそばされ」は誰から誰への敬意を表した言葉か、語群からそれぞれ一つずつ選びなさい(同じ言葉を複数回使っても差し支えない)。

語群

作者 読者 父 母 御子たち なかだち 娘 伏見宮 帥宮 帥宮の使い

問三 波線部A「いかでか分く方はんべるべき」C「そぞろに心あこがれぬと覚えて」について、現代語に訳しなさい。

問四 波線部B「数ならぬみののを山の夕時雨つれなき松は降るかひもなし」から掛詞をすべて抜き出し、それぞれについて説明しなさい。

問五 波線部D「そぞろに独り笑みして帰り参りぬ」とあるが、理由をくわしく説明しなさい。

(三)

次の漢文を読んで後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上送り仮名を省略した箇所があります。

藺相如之完璧、皆称之、予未敢以为信也。秦欲璧、趙弗

予璧、而無所曲直也。入璧而秦弗予城、曲在秦。秦出城而璧

歸、曲在趙。欲曲在秦、則莫如棄璧。璧入而城弗予、相如

則前請曰、大王弗予城、而給趙璧、以一璧故而失信於天下。

秦王未必不返璧也。今奈何懷璧而逃之、而歸直於秦。是

時秦意未欲与趙絶耳。令秦王怒而戮相如於市、^(注3)武安君一

勝而相如族、再勝而璧終入秦矣。^(注4)

(王世貞『弇州山人四部稿』による)

(注)

1 藺相如——戦国時代の趙の政治家。隣国・秦が自国内の十五城と趙のもつ璧(宝玉)とを交換することを提案した際、使者として璧を持って秦に赴いた。だが、秦の態度が誠実でないのを見るや、璧を秦に与えず従者に持ち帰らせた上で秦を非難した。その毅然とした振る舞いが賞賛を集めた。

2 曲直——間違ったことと正しいこと。

3 武安君——秦の將軍・白起。すぐれた軍事上の功績から「武安君」の封号を与えられた。

4 族——一族をみなごろしにする。

問一 傍線部 A・B・C の読みを、平仮名で答えなさい。送り仮名のつく語はつけて答えなさい。

問二 傍線部①は「秦王をして怒りて相如を市に戮せしむれば」と読みます。この読みにしたがって、解答欄の白文に返り点をつけなさい。(送り仮名不要)

問三 波線部のように、作者は藺相如についての世間の評価に反対しています。作者は藺相如はどうすべきだったと考えていますか。二十五字以上三十五字以内で説明しなさい。